

シンポジウム

## 鹿児島のみちづくり

— 課題と展望 —

---

コーディネーター 河 野 一 典

講師

奈良迫 英光氏

爲栗 健氏

河井 達志氏

(於 鹿児島県市町村自治会館 2014.9.13)

平成26年度、江角学びの交流センター・地域人間科学研究所が主管となって、シンポジウム「鹿児島のみちづくり—課題と展望—」を開催した。その具体的な実施概要については巻末の活動報告（P.80～）に譲り、本論ではシンポジウムの内容について概観する。

まず観光都市・桜島の火山活動・地域の商店街の3つの観点から鹿児島のみちづくりの展望と課題について、3名の講師が発表を行った。

奈良迫英光氏は、「交流人口の拡大で鹿児島を元気に」と題し、鹿児島県の現状と将来を見越した上で、氏の旅行代理店勤務の経歴を存分に活かした観光行政・事業の具体的な提言をした。

交流人口の拡大とは、将来の鹿児島県の人口減少を踏まえて、地域の経済的活性化のためには観光産業の振興を図ることが肝心であるという主張である。さすれば鹿児島の魅力的な観光資源は何か、それをいかにして（企画・PRの仕方・交通手段等）観光客の増大に繋げていくかということが問題となる。氏の提言は多岐にわたる。一つひとつが具体的に戦略的な施策として示されているが、観光とまちづくりには住民参加が不可欠であり、人々の地域を愛する篤い思いが支えており、今後もそのことに変わりがないことを改めてわれわれに認識させる発表であった。

爲栗健氏は、15年以上にわたり桜島を身近に感じながら火山活動の研究をしてきた知見を惜しみなくかつ分かりやすく発表した。

桜島の大正噴火100周年を経て、われわれの関心は桜島が中心になるが、鹿児島県は11の火山を抱えている。桜島は鹿児島のシンボリック観光資源であるが、人間で言えば10歳程度であり今後も活動が止むことはないということである。われわれは今後何十、何百世代にもわたって火山とともに生きる自然環境を受けとめ、享受するばかりでなく災害に備える覚悟を常に新たにしなければならない。大正噴火から100年経過した蓄積がどんな重大なことを意味するか、氏は丁寧にわかりやすく論じながら、災害への備えを冷静に落ち着いて説く。鹿児島の行政・産業ひいてはまちづくりを考える上で、特異な地理的要因を念頭に置くことを忘れてはならない。

河井達志氏は会社経営者かつ地域の商店街振興組合の要職の経験をもとに、まず疲弊が進む地域の商店街いわゆるシャッター商店街をいかに立て直していくかについて、具体的な施策の提言とともにその意義を強調した。氏は「Show-1グランプリ」「まちの駅」「宇宿タウンガイド」等のアイディアマンとしての精力的な活動を発表した。商店街の活性化は経済的な意味のみならず、地域の歴史・伝統の継承から高齢者の健康、子育て支援、防犯等々のまちづくり全体に関わるのであり、商店街はその主体的な担い手となるべきであると主張する。地域住民にとっては誠に頼もしいリーダーであろう。

ところで奈良迫氏と河井氏の具体的な提言には人材育成の重要性が随所に込められている。人材とはまさに新しい価値を創出する人財であり、地域を活性化するのは一つひとつの人々の働きの集成であることを肝に銘じたい。観光客はそのような人々の温もりを感じて鹿児島を後にし、また訪れたい、ここで暮らしたいと思うであろう。

また、爲栗氏の発表では、人知を超えた壮大な自然の中で生活するわれわれ人間のいのちを見つめながら地域社会の在り方を捉えなおす視点を与えられた。大自然を前にした豊かな暮らしとは何か、人間の生の原点・大切なものに回帰させられた思いである。

フロアーからの質疑応答では、やはり各地域での活動に精励していると察せられる方々から熱い情熱を感じられる意見を聞くことができた。

## 鹿児島のみちづくり

鹿児島人の県民性のことなど身近にしながら意外と知らない素朴な疑問から出発して、皆いかにして郷土鹿児島の魅力をアピールするべきかということに苦心している様子がうかがわれた。

最後に発表してくださった講師の方々および展示コーナーを開設していただいたNPO および自治体職員の方々をはじめ、ご来場いただいた皆様のご協力のもと、有意義な時間を持てたことを深く感謝申し上げる次第である。

以下本誌では、講師の方々に当日の発表・発言に基づきながら、各々の主張を存分に取り入れた論文・エッセイを改めて執筆していただいた。

(鹿児島純心女子短期大学教授)